ぱるちぇん

薬丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぱるちぇん

【Ｎコード】
Ｎ４８７４Ｚ

【作者名】
薬丸

【あらすじ】
引き篭りパルスィが勇儀の策略によって外に出ていく。
そこで気の抜けた黒猫に出会う。
ｐｉｘｉｖでひっそり載せていた物です。

（前書き）

人見知りのパルスィが猫の気ままさに振り回されるお話です。

ざあざあと雨が降り、しとしとと雫が垂れる。
ごうごうと風が吹き、さらさらと髪が揺れる。

「雨は愛しい。妬む世界が狭くなる。
だから雨は憎い。世界を身近に感じてしまうから」

枯れた川に架かる大きな橋の下、焚き火を目前に据えて座り、ひざを抱えて顔を埋める。

『全く最悪だ。地上になんて来るんじゃなかった。
あの馬鹿げた鬼め、私をこんな目に合わせやがって。
本当に、なんであんな馬鹿の言うことを真に受けてしまったのか』

顔を埋めて目を閉じれば、ここはあの地底と少しだけ似ていることに気付く。
思い出されるじめじめとした空気、時折吹き荒れる強風と騒音、長く日に遮られた仄暗さを感じる匂い。
そんな不快な感覚が、安心を呼ぶ。
ふと、地底での一番新しい記憶が呼び起こされた。
地上と地底を隔てる橋界線で、今朝こんな会話があったのだ。

「橋姫のお嬢様はおらんかねー！」

「…うっさい、そんな大きな声を出さなくても聞こえる。
なに？偉い偉い力の鬼様」

「ははっ、今日もじめじめ薄暗いねぇあんたは。
いいやいいや、それでもかまっちゃうのが私、四天王の力担当」

「うざすぎる、いいから要件を言え」

「いきなりつっけんどんだなー。はいはいまあいいさ。
用と言うほどの用じゃあないんだけど、あんたは地上には行ったのかい？」

「ああまたそれか、ヤマメも古明地も言ってきたけど・・・
私達は地上にいちゃいけないから地底にひっこんだんだろ。
縛る律が消えたとはいえ、理由もなしに行こうとは思えないわ」

「いいじゃないか、今は地上と地底の行き来は黙認状態。
いちゃいけないと決め付けた奴らももう大抵居らず、後は外に出たいという私たちの意志だけ。
そして理由は私が持ってきた」

「・・・面倒くさ過ぎる。理由なんて聞きたくないからさっさと帰れ」

「幻想郷にも橋が何本かあるらしくてな、年代ものも何個かあるらしいぞ。
橋姫として放って置いて良いのかな？」

「最悪、耳塞げばよかった・・・」

「ははっ先手必勝だ。
橋姫の性として、これを聞いちゃ行かざるを得ないよなー」

「おい、私の意志は何処へ行ったよ」

「んじゃ私の用事はこれで終わりだ、行ってらっしゃーい」

「ちっ、わかった。行けば良いんでしょ、全く」

そうして一つ目の橋でこれだ。
あの鬼め、教えるなら天候ぐらい気にしろというのだ。
もしこれで川が枯れていなかったら、今頃私は濡れ鼠だ。
これじゃ親切でも余計なお世話でもない、ただの嫌がらせだ。
いや、嫌がらせじゃないか。そうだ、これは嫌がらせだった。

「ただ単にひたすら憎いじゃないか。
全く、嫉妬が私の分野だってのに・・・憎しみなんて大別の面倒を見させるな」

雨は勢いを増している。これは止み時がわからない。

「通り雨という事を期待するしかない、か」

再び膝に顔を埋めて世界を狭める。
寝よう、と思う。
寝るには最悪に近い環境だけれども、寝るのが最善の選択。
誰もが知るように、憎しむ心は疲れるのだ。
起きて常々を嫉妬するより、寝て無為を得た方がよっぽど・・・

「なぅー」

聞こえてきた声に一瞬で気が抜けた。

「駄目だった、やっぱり寄せ集めのゴミでしか無かったよぅ」

声の方に顔を向ければ一匹の猫が身震いをしていた。

二股の黒猫とは不吉この上ない。

「ありゃ？火が焚いてある…って、先客ありだったんだね。
空気が動いてないから何もいないかと思ったよぅ」

目が合った。

くりんとした瞳に少しの警戒と多大の好奇心が浮かんでいる。

『ああもう本当についてない』

妬むべき世界が近づいてくる音がする。

黒猫はひたすら私に話しかけてきた。

暇な時間を潰す為に。

私は一方的な言葉をしばし受け、悩んだ結果、次の切欠で黒猫と会話をすることにした。

だってしょうがない、応えなければ徐々ににじり寄ってくるのだから。

猫の気ままさが妬ましい。

「おねーさんは名前何てゆーの？」

何度目かの問いかけはもう答えないことへの確認に成り下がっていた。

期待なんてしてないけれども…なんて澄ませた表情で偽装をして、
もしかしたらと期待を隠し切れずに呼びかけてくる。

「全く馴れ馴れしい。けどしょうがなく答えてあげる、だからまず
あんたが名乗りなさい」

だから私は期待に応える。
相手だけが暇を潰すのが妬ましいから、私は答えてやるのだ。

「おお！やっとおねーさん応えてくれたよ！！
いいね、やっぱり言葉は大事だよっ。
あたしは橙、大妖怪八雲紫様が式神の八雲藍様の式神さぁ！」

身軽に素早く、物音一つ立てずに傍にやって来る家猫。
どちらにしろ、雨にぬれた身体を寄せてくるのか。
応えるんじゃなかったと、辟易とする。

けれど一度応えてしまったのだから、続けないと。
続けなければいけない理由なんてどこにもないのに、何故かそう思
わされた。

「式神の式神って…まあいいわ。
私は水橋パルシィ、橋姫をやってるわ」

「橋姫？ここいらじゃああんまし聞かない種類だね、もしかしてあ
れかな、地底の出？」

「ええ、お邪魔だったかしらね」

「んーなんで？幻想郷は結構広いし、領地だ縄張りだと騒ぐ人は少

ないし、ということでまだまだ邪魔な妖怪なんていません。
・・・ああでも、地上侵攻大作戦！とかじゃないんだよね？」

「もちろんよ、そんな面倒なことしたくもないしされたくもない」

「だよねー。邪魔どころか少なくともあたしは助かったよ、おねーさんがここにいてくれて。
火は温かいし、話し相手はできたし、見聞も広がる。良い事尽くめ。
ほら、こんな狭い世界でも邪魔者なんていません、だから大丈夫なのです」

「そうかも知れないし、そうじゃないかも知れないわね」

「あはは、おねーさんの感情の方は勘定されてないけどねー」

「それはそうね」

「ああでも！橋姫ってあれだよね、憑いてる橋を渡る人に不幸を渡すんだよね？」

「まあ、一般的な認知として合ってるわね」

「あちゃ、あちゃちゃ、ねえねえおねーさん、お願いがあるんだけどね！
ここは猫しか通らないんだ、あたしの仲間たちなんだけどね、そいつらには不幸を渡さないであげてくれないかな！」

「それって妖怪としての領分侵害じゃない？」

「やっぱり？やっぱり！ううぁ、猫たちには回り道をさせないとだ…」

「・・・私を追い出すっていう選択肢はないの？」

「んんー仕方ないかな、妖怪の仕事を盗ると後が怖いって紫様が言ってたし・・・

なによりおねーさんは好い者っぽい」

「なにそれ、猫たちの長としてこんな短い時間で判断することじゃないでしょ。

・・まあ懸念することも無いんだけどね。私が不幸を渡すのは恋仲の番だけ。

猫たちには番で通るなと伝えれば良いわ」

「えへへ、素直に話してくれるおねーさんはやっぱり良い者だよ」

「妬むのは疲れるんだ、些細な事で妬みを渡し渡されるなんて御免なのよ」

「うんうん、わかってるんだよ。猫たちにはそう伝えておくけど、おねーさんこの橋に居つくの？」

「いや、私の居場所は地の底だけ。身の丈にあったふさわしい場所はあそこしかないの。

さっき言った呪いは私の残り香みたいなもの、時間が経てば直ぐ消えてなくなるわ」

「ありゃ、それはそれで寂しい話だ。合縁奇縁の掛かり関わりかもと思ったのになぁー」

「・・・そりゃなんとも、変わった感想」

「そうかなぁ、そうかもなぁ、でもそうなんだもん。
例え厄介な能力を持っていようとも、良い話を出来る相手が去ってしまうのは寂しいもんでしょ？」

「寂しい、ね」

「おねーさんはそういう寂しさって感じたこと無いかな？」

「無いわけがない。
寂しさは妬みを繰る私の馴染み、嫉妬と寂莫は表裏の存在だから。
でも、そんなものは久しく感じてないわね」

「なんで？」

「言ったでしょ、表裏って。妬んでいる間は寂しさが引っ込んで、妬みが引っ込むと寂しくなる。
私はずっと妬んでいるから、寂しさとは久しく疎遠なの」

「ずっとって、何をそんなに妬む事があるの？」

「番であろうが、一人であろうが、物であろうが、自然であろうが、現象であろうが。
私の五感を通して触れる実像結ぶ外界から、
誰かが幸せになるかもしれないと想像を張り巡らして形作った虚像まで、
ありとあらゆる事象が私の妬みの対象だもの」

愛して信頼して裏切られ、男の一人が憎らしく、女の一人が妬ましかっただけなのに。
それがいつしか、睦まじい恋仲番全てが妬ましく憎くなった。
そうして橋を渡り歩き、不和を渡し歩いて幾星霜。

気付いたら、こんな有様になっていた。
気付いたから、あんな地の底の底に安寧を求めた。

本当にどうしてこんな事になってしまったんだろう？

「そりゃすごい。おねーさんは世界を愛せる人なのか」

「？？」

「妬ましいって、羨ましいって事で。
憎いって、愛しているって事で。
おねーさんはこの世界を嫌っちゃいない。
むしろ好いているから、そうなるんでしょ？」

「好き？嫌い？」

「そう。
好き嫌いで語るなら、おねーさんは好きを前提に妬んで憎んでる。
本当に嫌いならさ、なんで好き好んで五感に捉えたり想像なんてするの？
違うよね。好きだから見ていたい、聴きたい、味わいたい、嗅ぎたい、触れ合いたいくなる」

好き嫌い？あれ、それってどういう感覚の物だったろう？

「それに紫様が言ってたんだよ。
悪霊はしすてむとかなんとか？えっと、条件が当て嵌まると勝手に発現する現象みたいなものだって。
それじゃあ自我は持てないし保てない。
あるのは指向を持った遺志だけで、思考を伴った意思にはならないって」

そういうのなら私は悪霊だ。
橋に来ただけで呪いを残す、どうしようもない害悪だ。

「でもおねーさんは私にかまってくれてるし、火を囲ってもくれてる。
そんな優しい妖怪が、しすてむに忠実な悪い妖怪な筈が無いよ」

優しい？
この能天気な猫は何を誰に言ってるんだ？

「いやいや、何を驚いた顔をしてるのさ。
今藍様に交信して橋姫の話を詳しく聞いたけど、あたしはそうだと確信したよ？
だっておねーさんは恋に狂ったんだよね。
恋なんて、好きじゃないとできないでしょ」

ああ、狂ったんだ。好きという感情が荒れ狂って逆しまに移った。

「だからその言い分がおかしいんだってば。
好きの反対は嫌いとか憎いとかじゃなく、無関心だもの。
本当の本当に嫌いになったら、どうでもよくなっちゃう。
嫌う熱量を保つ事も出来なくなって、意識から消しちゃうんだ。
けれどおねーさんは、今もなお思い続けてるんでしょ？」

ちょっと待ってよ。
妬ましいという気持ちを一番理解しているのは私なんだから、適当な事を矢継ぎ早に投げないで。
何を何て返して良いか、わからなくなっちゃうじゃない。
だから、その爛々と輝く猫の目でこっちを見ないで。

「おねーさんは、世界を愛してるから、妬ましいんだ」

だからそれは、

「…そうなのかもね」

ああもう全て認めよう。
否定する余地も無いことだ。
好きで好きでしょうがないから妬ましい。

だから私は。

「だって世界は未だに薔薇色なんだもの」

恋を募らせ愛を咲かせ、世界が変わる瞬間があった。
世界とはこんなに美しいのだと知ってしまった。
見るもの聞くもの味わうもの嗅ぐもの触れるもの全てが愛おしく狂おしいと気づいてしまった。
そうしていつしか私の愛は一人の男から世界に移っていたのだ。

だから私は番に呪いを渡す。
一つの存在なんかにうつつを抜かしている場合ではないのだと、愛おしき世界の存在を知って欲しいから渡すのだ。

「ああ、思い出した」
妬みに妬むことで封印していた圧倒的な熱量が鎌首をもたげる。
磨耗しきったと信じ込んでいた感情が奮い起こされる。
「思い出しちゃったわ・・・」
「えっ、本当！あははっ、あたしの高説も中々やるじゃないっ！」
「そうね、貴方が思い出させてくれたのよね」
「おねーさんもすごく明るくて可愛い笑みを浮かべれるんだねー」
「ええ、恋をしてる人間が笑みを湛えないなんて嘘じゃない」
「だよねー。うん、恋愛最高！
・・・って、えっ？あれ？」
「恋は、愛は燃え上がるもの。
人の身を焦がし、周囲を巻き込み狂わせる熱情の焔。
なら人の身ならざる、嫉妬の妖怪が望む恋愛って、どれぐらいの炎になるのかしらね。
ねえ、知覚の全てで世界を妬み続けていた熱量ってどれぐらいのものか、貴方には想像つく？」
「おねーさん？」
「そして言ったでしょう？妬む事で抑えていた物を思い出しちゃったって。

反転する衝動を私は止めれない、止めるなんてできるはずがない」
「ゆっくりにじり寄ってくる様がものすごく背筋にくるのはなんでなのでしょうか！
ちょ、ちょっと待とうよ落ち着こうよ話し合おうよおねーさんっ！」

「気ままな猫の考え無しで、平城京を恐怖に染め上げた恋愛譚が再臨する。
いいえ、あの時から燻らせていたのだもの！今ならずっともっと大きく深く愛せる気がするわ！
でも久方ぶりのことで少し不安なの、だからねえ、練習に付き合ってくださらないかしら？
目の前の恋を燃やし尽くす練習に」

「うにゃっ？！うわっ、うわっ！やっちゃいましたかっ」

「うふふふふっ、あはははぁっ」

「きゃー！きゃー！にゃーっ！」

「・・・冗談よ」

「ふにゃーっ！ふきゃーっ！
・・・って、えっ？」

「だから冗談、偉そうに説教する年若い黒猫に対してのお灸よ。
私に恋愛の高説を賜ろう何て千年早い」

「・・・ふにゅ～、びっくりしたよぉ」

「ふふふっ、でもまあ懐かしい気持ちを思い出せたのは本当」
妬ましいは寂しいの隣人で、妬ましいと寂しいの主人は好ましいだ。
好きだから嫉妬する、好きだから寂しくなる。
だから私の大元が好意なんて当然の事。
でも好む事が霞むほどに、妬む事に慣れすぎてしまった。

「ありがとう、猫の式神。
少しだけ、ほんの少しだけ救われたかも知れない」

「てへへ、お礼は素直に嬉しいね」

そう言って素直に照れる猫は可愛げがあった。
うん、調子に乗らずにそうしていれば猫とは可愛い生き物なのだ。

「あっ、やっぱりおねーさんの笑顔ってすっごい可愛いよ！」

「あらそう？」

「うんうん、これは嫉妬せざるを得ませんよっ！」

きっ、と睨み付ける。

「ひあっ、ごめんなさい！余計な一言でしたっ」

はあ、猫というのは本当にすぐ調子乗るのだから。

「でも晴れてきた天気に免じて許してあげましょう」

「あっ、本当だ！」

二人で橋の軒下からお天道様の元へ。
んんーと二人で背筋を伸ばす。

「うん、それじゃあおねーさん、色々と楽しかったよ！ありがとねっ」

そう言って猫の式紙はさっさと走り去ってしまった。
なんとも呆気ないと言うか、本当に気ままな相手と時間だった。

「改めてありがとうと言いたかったけれど、まあいいか」

もう一度背筋を伸ばすように深呼吸をする。
そこで改めて気付く。
太陽の眩しさと温かさ、雨の後特有の澄んだ空気、世界の鮮やかな色彩、濡れた草の柔らかさ。
本当に、世界には愛するべきものが沢山存在している。

「猫の気ままさもその一つかな」

先ほどのやり取りを思い出し、くすりと笑う。
そして一つ、思い立った事がある。
目に掛かる太陽の光を片手で遮り、気持ちを代弁するかのように上を向く。

「せっかく恋する世界を思い出したんだから、旅にでも出ようかしらね」

声に出して強い納得があった。

とても良い案に思えたし、すぐに実行しようとも思ったのだけど、
……何かが引っかかる。
なんだろうか、記憶の端に杭のように残るもの……旅を始める前に済ませなきゃいけない事がある気がする。
境界線の点検？旅支度？いや、もって個人的な恨みのようなものだった気がするけど、

…まあいいか
思い出せないならどうでもいいことなのだろうと心を切り替える。
とりあえずは準備をする為にも地底に戻ろう。

そうして私は今一度橋と空を見て、地底の入り口まで戻るのだった。

地底の大橋

「結界に綻びはないし、しばらくは大丈夫。
持っていく物もこの身一つあれば事足りるし、あとは古明地に伝えれば終わりかな。
・・・ああいや、始まりか」

周囲を見渡して思う。
思う存分に地上を楽しんだら、この身の丈にあった場所に必ず帰ってこよう。
愛する世界をどれだけ広げようと、ここが私の最も愛している場所の一つである事に変わりはないだろうから。

「おや橋姫様じゃないか」

背後から声がした。

ああそういえば、何かを忘れていると思っていたのだ。
「なんだいなんだい鼻歌なんか奏でちゃって、随分と機嫌が良さそうだね」
機嫌が良いのはお前の方だろう！と心中で吐き捨てる。
かけられた声は弾んでいて、楽しそうな雰囲気を隠そうともしていない。
「いやーお前さんに地上に行くことを勧めた甲斐があったというもんさ。
さすがあたい、慧眼だねぇ」
きっと奴は憎たらしくにやにやとした表情をしているだろう。
頑なだった私を掌の上で転がしたみたいで気分を浮つかせているんでしょう？
でもね、
私はそれ以上に浮かれているのよ？
「ふふふっ、うふふふふっ、すっごく気に入らないけれど、そうよね。
全部全部全部全部貴方のおかげだもの。
私に出来る精一杯の感謝をしなければいけないわよねぇえ？」
感情を素直に言葉にして、私は喜色満面の笑みを浮かべて振り返る。
返ってきた鬼の四天王様の反応はとても失礼な物だった。
私の顔を見た途端、にやついた表情を凍らせて後ずさる始末。
「あれ？パルスィさんってそんな楽しげな方でしたっけ？」

「ええもちろんよ、恋する妖怪が笑みを浮かべないわけが無いでしょう？」

どこかで言ったような台詞がすんなりと出てくる。
そうして私は勇儀にゆっくりと近付いていく。
そうして勇儀は私からゆっくりと離れていく。
一定の距離を保ってじりじりと移動する。

「ねえ勇儀、それ以上は欄干だから後ずさる事はできないわよ？
だからねえ勇儀、私の話を聞いてよ」

「もちろん話を聞くぐらいなら何日と付き合うよ、だけどそれはそんなに近付かなくても出来ると思うんだ」

「あはは、無理無理。
猫の気まぐれで想いが掘り起こされて、猫の気軽さで思いは吐き出せなかった。
心の中でね、炎が燻りっ放しなんだ。
それならもうさ、ここでやっちゃうしかないわよね？」

「やっちゃうってなにをさ！話し合うんだよね？！気心知れた感じで酒でも酌み交わしながらさ！！」

その言葉にすぐ答えを返す事はせず、私は近付く事をやめない。
勇儀は更に後ずさろうとするが、欄干に腰をぶつけてしまう。
一方的に縮まる距離。そして私はたどり着く。
私よりも大分長身な勇儀を欄干に押し付け、顔を近づける。

「なぁっ、近っ」

私の恋する瞳には世界の全てが薔薇色に見える。
ねえ、貴女には世界が何色に見える？

「簡単な話よ、きっかけは貴女。
責任を取ってねって事」

吐息がかかるほどの至近。

「えっ、ちょ、ぱ、パルスィ？」

綺麗な黒曜石の瞳を覗き込む。
そこには緑眼を爛々と輝かせる私がいた。

「きっと大丈夫、久しぶりだけど、上手に愛せると思うから。
だから、貴女の見ている世界に恋をして」

その言葉を聞いて勇儀の顔が深紅に染まる。薔薇色に染まる。

「うわわっ！だめ、それは駄目だ！きっと何かが駄目になるっ！助けて萃香ぁ！」

そういって勇儀は私の拘束を力で振り解き、走って去ってしまった。

「ありゃ、逃げられちゃった」

残念ながら、私の瞳はまだ鬼の心を縛れるほどではないみたいだ。

「でもこれは帰って来る理由がもう一つ出来た」

私は小さく笑みを浮かべ、勇儀が走り去った逆の方向に眼を向ける。

「とりあえず地霊殿に向かうとしますか」

そうして私は歩き出す。

向かう所に恋の火種がありますようにと祈りながら、愛する世界への旅は始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4874z/

ぱるちぇん

2011年12月16日18時01分発行